

たけとんぼ

戸田市立新曽小学校・戸田市立美女木小学校

「ことばの教室」7月号

—平成23年7月1日発行—

むしむした日が多くなってきました。あと3週間で、夏休みを迎えます。そろそろ、夏休みの計画を立てているご家庭もあるかもしれません。長期休業前に、親子で「ことばの学習」について振り返り、成長したこと、頑張ったことをほめてあげてください。



戸田市には、2校のことばの教室があり、現在、合わせて95名の児童が週1~2回、通級し指導を受けています。その内訳は、発音を誤る児童が8割ほどで、1番多いです。その他に、吃音がある児童や難聴の児童も通級しています。今回は、「難聴について」取り上げてみたいと思います。

「聞こえない」と「聞こえにくい」の違い

「難聴の児童と勉強しています。」とお話すると、多くの方に「手話で学習しているのですか？」と質問されます。難聴＝「聞こえない」と考える方が多いようです。難聴は、「ほとんど聞こえているが、わずかな音の違いが聞き取りにくい」から、「音を増幅する補聴器を付けていても、ほとんどの会話が聞き取れない」場合まで、個々に「聞こえにくさ」は違います。「聞こえない」のではなく、「聞こえにくい」のです。「聞こえにくさ」を聴力レベル『dB（デシベル）』という単位で表します。

聞こえにくさの程度 —難聴の区分と聞こえへの影響—

難聴の程度	聴力レベル	聞こえへの影響
軽度	25~50 dB	・声小さかったり、話し相手が見えない場合に、聞こえにくい。 ・騒音下で遠隔の話を聞き逃すことがある。 ・無声子音を聴き違いやすい。
中等度	50~70 dB	・知っている語いと構文で話してあげれば、1~1.5mの距離で対面した会話は理解しやすい。 ・補聴器をつけないと聞き取りづらいことが多い。
高度	70~90 dB	・補聴器をつけないと、耳から30cmくらいの距離の大きな声がやっと聞こえる。 ・補聴器を最適に調整できれば、会話の聞き取りも可能になる。
重度	91 dB~	・補聴器の力で、音韻情報や母音の聞き取りができる。 ・口の動き、手指サイン、絵、書き言葉など、視覚情報が有効になる場面が増える。

出典：大沼直紀（1997）『教師と親のための補聴器活用ガイド』

補聴器をつけると

補聴器をつけると、全ての話がわかるわけではありません。今まで聞こえなかった音が聞こえるようになりますが、限界もあります。音を大きくしますが、音の聞き分けまでは補償してくれません。話し言葉だけでなく、周りの騒音も同じように増幅するので、周りがうるさい環境だと、かえって聞き取りが悪くなる場合もあります。補聴器をつけても、子音の聞き取りは難しいようです。

休み時間の出来事です。

「わたし、『ふで』をわすれちゃった。ももちゃん貸してくれる？」

「うん、いいよ。はい、美香ちゃん。」

「……なに、これ『ふえ』じゃない。わたしは『ふで』を貸してと言ったのよ。」

もも子は、どうして『ふで』と『ふえ』をまちがえたのでしょうか???

「あっ、そうか。ももちゃん、ごめん。『ふで』と『ふえ』 口の形が同じだったね。」

そうなんです。耳で聞こえにくいところは、口の動きを手がかりにしているもも子。同じ口の形だと、まちがえてしまうことがあります。それに気づいた美香ちゃんは、『ふで』を貸して と、紙に書いて伝えました。



絵本「ハートはなにいろ（難聴児のために）」より抜粋

難聴の児童への対応

- ・ 難聴の児童の多くは、「読話」と言って、話し手の口元を見て、話の内容を読み取っています。話しかける時は、子どもと視線を合わせ、少し大きめの口でゆっくりめに、ことばの長く伸ばしすぎないように話しましょう。わからない様子の時は、言い方を変えてみてください。極端にゆっくりすぎたり、一音一音を区切って言うと、ことばの持っているリズム・イントネーション・アクセントが不自然になり、かえって聞き取りにくくなる場合もあります。
- ・ 話の手がかりになるものがあれば、話し手の表情や態度などから大まかに推察することが可能となるので、メモをしたり（学級では板書など）、話の内容に関係のある具体物や絵などを見せたりすると、児童の不安が少なくなります。
- ・ 難聴の児童は、校内放送や駅の放送など音声情報のみだと、速やかに正確にキャッチすることが困難です。緊急時には、周りの大人や児童がどのように対応したらいいか、事前に話し合っておくことが大切です。



参考・引用文献 「難聴児・生徒 理解ハンドブック」

「z s z 聴覚障害児の理解のために 第26集」